

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520428

研究課題名(和文) ヨーロッパを再発見するメスティソ：セサル・バジェホの中後期言説の総合的研究

研究課題名(英文) Mestizo Rediscovering Europe: Comprehensive Research of Cesar Vallejo's Discourse in His Middle and Late Period

研究代表者

松本 健二 (Matsumoto, Kenji)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：00283838

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：ペルーを代表するスペイン語詩人セサル・バジェホ(Cesar Vallejo, 1892-1938)の代表的詩集『トリルセ』(Trilce, 1922)をはじめとする中後期の前衛的な韻文作品を、メスティソ(mestizo)という語に象徴されるペルー文化特有の文化的混交という概念を手がかりに、また詩人が体験した1920年代の戦間期ヨーロッパ文化やスペイン内戦との接触過程をも視野に入れつつ検証し、その結果、それらの作品が、多様な矛盾する解釈が記号作用的に出会う場としてデザインされた重層的かつ創造的な詩的想像空間であるという結論を導き出した。

研究成果の概要(英文)：The subject of my research is Cesar Vallejo, a leading poet in Peru who poeticized in Spanish. I gave thorough thought to his avant-garde works composed in his middle and late period, such as his representative anthology Trilce.(1922); following the concept of cultural mixture, represented by a cultural-specific word of Peru "mestizo", and also eyeing his direct contact with European culture of the 1920's interwar period and Spanish Civil War. As a result, I came to the conclusion that his works became multi-layered creative spaces of poetic imagination, well designed for diverse and contradictory interpretations to meet and interact symbolically.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ラテンアメリカ文学 アヴァンギャルド ペルー文学 現代詩論

1. 研究開始当初の背景

今日なおペルーを代表する詩人として知られるセサル・バジェホ(César Vallejo)は、1892年にアンデス山中の村サンティアゴ・デ・チューコに生まれ、沿岸部の都市トルヒージョや首都リマで詩作を開始した後、1923年に渡仏、またスペイン市民戦争に際しては各国の作家によって実施された二度の共和制擁護のための国際会議に参加するなど、左翼の闘士としても知られるようになり、1938年にパリで客死した。残された詩集は前衛性と土着性が混交する独自の世界を構築しており、ペルーのみならず、その後のスペイン語圏全般の詩人たちに大きな影響を与えた。代表作はペルー時代の第一詩集『黒い使者たち』(Los heraldos negros, 1918年)、スペイン語前衛詩の代表作にも数えられる『トリルセ』(Trilce, 1922年)、さらに渡欧後に書かれた詩を本人の没後独自に編纂した『人間の詩』(Poemas humanos, 1939年)、スペイン市民戦争を題材にした『スペインよ、この盃を私から遠ざけよ』(España, aparta de mí este cáliz, 1939年)の4詩集。日本では文学史に名が現れる程度であり、翻訳もアンソロジーに数編が紹介されている程度で、一般読者の目にとまる機会は乏しい詩人であるが、たとえば英語では単独の詩全集が数版刊行されていて、また米国をはじめとする英語圏やペルーをはじめとするスペイン語圏の研究機関ではバジェホ特有の難解で多義的なテクストは今なお極めて重要な研究対象のひとつとされている。

バジェホ研究の学術的背景については、時代を追って以下4期に分類して把握することが可能である。

研究の萌芽期とも言える第1期は1960年代にアルゼンチンのコルドバ大学で数年にわたって断続的に開催されたワークショップ“バジェホ講義(Aula Vallejo)”を嚆矢とし、1968年に生前散逸していた原稿なども合わせた詩全集が刊行される時点をもって完成する。作品研究は主として生前に刊行のあった4冊の詩集を中心に解釈研究がすすめられた。この時期の研究の問題点は、雑誌草稿など作品の成立過程を論証できるような書誌学的情報の未整理と、1910~20年代のペルーにおける文化的動態との関連性に関する検証が不足していたこと、さらには渡欧後のバジェホのスペイン人民戦線における活動に関する多角的な資料整理が未成熟であったことがあげられる。

研究の成熟期とも言える第2期は、現在も第一線で活躍する各国の研究者たちが競って専門研究書を刊行した1970年代であるが、抜本的な資料整理のめどは立たないまま数多くの解釈研究が乱立し、とりわけ第二詩集『トリルセ』という、スペイン語アヴァンギャルドの代表的作品に関する解釈・注釈本が多数現れ、結果として第1期の課題は先送りされた。

次の第3期におけるバジェホ研究については、1990年代に入って大きく進展した書誌学的研究の成果が特筆に価する。ペルー・カトリック大学を中心に生前の草稿やヨーロッパ時代の数多くの未整理原稿が整理され、詩以外の作品が翻訳・ジャーナリズム・書簡などジャンルごとに整理され、各全集の刊行を通じて、全世界の研究者によって利用が可能となった。

なお、研究代表者は本研究を開始する以前にこうした先行研究に基づく資料整理を論文「セサル・バジェホ文献解題(1)生前詩集」(Estudios Hispánicos、査読無、26号、2002年、117-132)としてまとめている。また、日本におけるバジェホ研究に関しては、2008年10月に韓国檀国大学で開催された国際学会における口頭発表をもとにした論文「César Vallejo en Japón」(Revista Asia y América、査読無、Vol.9, No.2、2008年、19-35)としてまとめている。さらに、第一詩集『黒い使者たち』については論文「二つの伝統の狭間でセサル・バジェホ『黒い使者たち』に関する一考察」(大阪大学世界言語研究センター論集、査読有、2010年、53-72、<http://hdl.handle.net/11094/9351>)としてまとめている。

本研究が開始した2011年時点においては、上述したような充実した研究資料を基にした、より多角的なバジェホ研究が進みつつあった。また、上述した檀国大における国際学会のように、アジア各国(韓国、中国、台湾、インド、日本)のラテンアメリカ詩研究者が一堂に会する研究成果公表の場も設けられるなど、バジェホなどのスペイン語近代詩に関する国際的な研究交流がいつそう盛んになりつつあった。研究代表者は修士課程在籍中からバジェホをはじめとするペルー文学研究に取り組んでおり、所属研究機関大阪大学と学術交流協定を結んでいるペルー・カトリック大学とも人脈を有し、またアジア各国のバジェホ研究者らとも連携をとれる環境にあった。

2. 研究の目的

研究代表者は本研究開始前までの研究において、特に第一詩集『黒い使者たち』を対象にバジェホのメスティソ(白人とインディオの混血)性というテーマを考察し続けてきた。

バジェホは二人の祖父がスペイン人司祭で二人の祖母が共に先住民という、当時であっても極めて珍しいと典型的なメスティソであったが、本人はケチュア語も解さず先住民文化にも疎かった。スペイン語韻文というツールを表現手段に選びつつも伝統的なスタイルに収まりきらなかったバジェホ自身の“未知の部分(lo incógnito)”への傾倒には、バジェホの中での言語化される以前の無意識的領域へのこだわりが見られ、そこに、

常に母や故郷といった詩的イメージが関わってくるということを、研究代表者はこれまで指摘し続けてきた。

本研究ではその難解さゆえにスペイン語圏アヴァンギャルドの代名詞ともなっている第二詩集『トリルセ』におけるメスティソ性の分析を第一の目的とする。なお、ここでもちいるメスティソ性という概念は、単なる血統や生物学的な関係のみにとどまらず、いわば各種多様な意味と解釈をテキスト内に混交させる異種同居性、現代のペルー文化研究において用いられる広義のチョロ性にも近い概念として想定されている。本研究ではバジェホの作品とその形成過程、さらにはその受容過程をも視野に入れつつ、バジェホにおけるメスティソ性の多様な動向を検証する。

次に、渡欧後のバジェホ作品を読むうえで重要となる諸言説を手掛かりに、パブロ・ネルーダやオクタビオ・パスらもかかわった国際作家会議におけるバジェホの動向やその前後の政治的発言などを追うことで、後期のバジェホ像および、その死後に作品評価が固まってゆく経緯を、同時代の証言等に基づいて明らかにする。周知のように、ホルヘ・ルイス・ボルヘス、ミゲル・アンヘル・アストゥリアス、アレホ・カルペンティエールら多くのラテンアメリカ作家たちが1920～30年代の渡欧体験を経てそこから飛躍的な創作上の進歩を遂げているが、このような作家たちのヨーロッパ体験も決して一律ではなく、最近ではその比較研究も進んでおり、バジェホについても母国の雑誌へ寄稿しつづけていたコラム等の言説も含めたトータルな表現活動の検証が進んでおり、同時代に起きていた世界的事件やペルー国内の諸問題についてバジェホが新大陸出身者ならではの独自の見方を有していたという痕跡を積極的に取り上げる論考が増えている。こうした国際的な研究の進捗状況に足並みを揃えることは言うまでもないが、本研究ではそこに上述したバジェホの詩特有のメスティソ性、異種要素同居性という観点をもちこむことで、従来の研究では論じつくされていない中後期バジェホ像に新知見を提供することを目標とする。

3. 研究の方法

本研究課題は資料収集整理を軸として大きく以下の項目から成立している。1) バジェホ作品(特に『トリルセ』の形成過程と受容過程における広義のメスティソ性の検証。2) 渡欧後のバジェホの全言説に関する研究。以上の研究を進めるにあたって、先行研究の精査、関連言説の収集整理、そのうえで学会発表や論文執筆を通じた成果公表を行なうこととする。

まず2011年度には、すでに手持ちの資料を整理したうえで、特に近年刊行された新し

い雑誌論文と博士論文を中心に欠落部分の収集を行なう。それにあたってペルー・カトリック大学図書館の雑誌文書資料室等を利用するためリマへ渡航する。同時に詩集『トリルセ』についてメスティソ性という観点から先行研究を改めて整理し、研究の最新動向を確認したうえで、特定の詩に関する具体的な検証を行ない、それを論文化する。

次に2012年度は、バジェホの各種詩全集のほか、1924年の渡欧以降の全言説のリストをつくり、その欠落部分を埋める作業を進める。また渡欧後にバジェホが扱われた新聞記事等の二次的資料の情報確保にも努める。それにあたってバジェホ関係の資料を独自に収集しているリマの研究者にコンタクトを取り、その資料室を利用するためにリマへ渡航する。同時にバジェホとシュルレアリスムや国際作家会議に関係した諸言説のリストをつくり、その欠落部分を埋める作業を進める。また前年度の研究成果を海外の学会で公表することを目指す。

最終の2013年度は2年間に収集した資料に基づく研究成果をまとめる作業を進めると同時に、研究の集大成を国際的に発信することを目指す。また同時にバジェホの日本語版詩全集刊行へ向けて詩の翻訳も進めることにする。

4. 研究成果

2011年度はまず近年バジェホに関して書かれた英・スペイン語の博士論文、特にカテドラ版の『トリルセ』が刊行された1991年以降に発表された論文を22点購入し、その傾向を精査した。その結果、対象テキストは多岐にわたるが、近年はバジェホ単独のテキストを対象にした研究に加えて同時代のスペイン語の詩人(ピセンテ・ウイドプロ、ブランカ・バレラ等)や他言語の詩人(クラリス・リスペクトール、シルヴィア・プラス等)を含めて特定のテーマを論じる研究が多いことが判明した。またペルーの文化に絞って論じた研究については主として小説『パコ・ジュンケ』や『タングステン』などが取り上げられることが多いことが分かったが、これは従来の研究の流れを踏襲しているものである。さらに全体に詩的言説と政治の関係を扱った論考が多いことが目についたが、これは著者に米国人研究者が多いことも考慮にいれる必要がある。『トリルセ』に絞って論じた博士論文は3点あり、うちの1点は身体性をテーマとしたもの、1点はスペイン語アヴァンギャルド全体におけるエクリチュールと主体の関係性という枠組みからバジェホを論じたもの、1点は従来の先行研究を総括的に記述したものと、本研究の拠って立つ見地に直接的に関係する論考は見られなかった。

上記の結果、従来型の解釈に大きく変更を迫るほどの新知見を提示している研究はほ

ば見られず、大半がポスト構造主義的などちらかと言えば派生型の解釈研究であることが判明し、バジェホの詩的言説自体にメスティソ的な異種同居性がデザインとして組み込まれているという本研究の一定の独自性が確かめられたと言える。

この他の資料収集については2012年3月21日～29日にリマへ出張し、ペルー・カトリック大学等を中心に一定の成果を得た。これらの資料を分析するなかで、特にリマ市の近代化とそれに伴う民族文化の再編成という現象に注目し、地方人口のリマへの大移動集中化という観点からバジェホ自身の移動（山岳部サンティアゴ・デ・チュエコから沿岸小都市トルヒージョへ、さらに首都リマへ）の痕跡を見た場合に、移動に伴う故郷喪失感と同時に新たな生活のトポスを模索する過程が詩作に反映していることが判明した。

上記の資料収集整理を踏まえたうえで、学会発表を行ない、この際の考察に基づいて雑誌論文を発表した。この論文では『トリルセ』の冒頭の詩Iを対象に、その先行研究を刊行直後に遡って検証することで、もともと詩が備えていた多義性が後世の解釈によって肉付けされていった過程を検証した。結果として『トリルセ』のテキスト全体がもともと異なる解釈や想像を許容しやすいよう極めてバランスよく設計されていることが浮き彫りとなった。

2012年度は前年度に発表した論文の分析対象を『トリルセ』と没後詩集『人間の詩』などに拡大して考察、その成果をメキシコで4月26日に開催された国際学会におけるバジェホを対象としたシンポジウムで発表（学会発表）し、ここでメスティソ性というテーマを強調して参加していた米国・メキシコの研究者らと意見を交換した。なお、このとき入手した情報を加味して発表内容をさらに検討し直し、その成果を年度末に雑誌論文を発表した。

同時に渡欧後のバジェホがヨーロッパを記述したテキストに関する資料リストを作成し、その欠落部分を埋めるべくペルーのバジェホ関連資料収集家ホルヘ・キシモト・ヨシムラ氏と連絡を取り、2013年3月13日～28日にリマへ出張、同氏の文書資料室を訪れて各種資料を入手した。バジェホはスペインとフランスからペルーのリマやトルヒージョの地元紙に膨大な数の記事を書き送っているが、それらは再整理された全集版で見ることができず、新聞などの元媒体に掲載された時の状況を確認できなかった。写真等さまざまな図版とともに提示されたそれらのテキストを参照できたことで、バジェホのペルー観、ペルー人としてのヨーロッパ観などがペルー国内の媒体によってどういった解釈を施され、またどういったデザインのもとで再提示されたかを確認することができたのは、とても意義深いことである。

2013年度は過去2年間に収集整理した資料を基にバジェホの詩的言説における普遍＋ヨーロッパ文化と根源＋メスティソ的ペルー性との相克について考察を深めると同時に、バジェホがヨーロッパ体験を経て逆になどのようなペルー観を獲得していったのかについての研究を進め、その成果を学会発表として報告した。

研究のなかで判明したことは、中期の代表作『トリルセ』から没後詩集、さらには政治的言説をも含むバジェホのあらゆる詩的言説が、アンデス＋母＋根といったイメージを基軸とする内なる未知と、キリスト教ヨーロッパ＋父＋書物といった外在的かつ論理的な知のあいだの葛藤の場として設計されており、その結果テキスト内で生じている複数の記号作用の衝突がもたらす意味的な重層性が一読した際の「難解さ」という印象をもたらすもの、読み手（＝読者、解釈者）の内側にさらなる記号作用を惹起するのにちょうどよい「隙間」とも言える余裕をつくりだしていることが判明した。詩集『トリルセ』をはじめとするバジェホの中後期言説には、単独の価値体系のもとに強固な論理的意味作用の秩序を有するヨーロッパ文化が本来抱えていた（が故に1920年代の戦間期に急激に顕在化した）根源的な無秩序と不安定さ、ある種の秘めたる異種同居性を白日のもとに晒す力が秘められていたものであり、そうであるが故に、今日に至るもなお、前衛詩としては極めて珍しいことに、スペイン語圏の詩作におけるひとつのパラダイムとなり得ているのである。

最後になるが、3年間の研究成果を国際的に公表する場を模索し続けた結果、2014年10月20日から26日までペルーのリマとトルヒージョで開催される国際会議 Vallejo Siempre への参加を2014年1月に取りつけることができた（学会発表）。これについては会議の最中に刊行される論集でも論文投稿受理が決定しており（雑誌論文）、国際的レベルでのバジェホ研究コミュニティへの発信という、本研究最大の目的は、ある程度達成できたものと自負している。

なお、国内へ向けては翻訳『セサル・バジェホ詩全集』刊行の目途をつけた（現代企画室刊、刊行年は2015年以降）。日本語環境における本研究の還元についても一定の成果が見通せたことは望外の喜びである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

松本健二、Trilce como paradigma del mestizaje poético, Actas de “Congreso Internacional Vallejo Siempre”、査読無、2014年、掲載決定済み

松本健二、Hacia el entendimiento cabal del sentido “mestizo” en *Trilce* de César Vallejo, *Estudios Hispánicos*、査読無、2013年、61-68

松本健二、糞のアマルガム セサル・バジェホ『トリルセ』に関する一考察、大阪大学世界言語研究センター論集、査読有、7号、2012、15-34
<http://hdl.handle.net/11094/6347>

〔学会発表〕(計4件)

松本健二、Trilce como paradigma del mestizaje poético, Congreso Internacional Vallejo Siempre (セサル・バジェホ国際会議)、2014年10月22日、リマ市およびトルヒージョ市(ペルー) 参加決定済み

松本健二、セサル・バジェホとペルー性、関西スペイン語文学研究会、2013年10月6日、神戸キャンパスプラザ

松本健二、Trilce como paradigma mestizo, VII Encuentro Internacional de Literatura Hispanoamericana (第7回イソパノアメリカ文学国際会議)、2012年4月26日、トラスカラ大学(メキシコ)

松本健二、『トリルセ』の受容と解釈史における諸問題、日本イソパニヤ学会定期大会、2011年10月9日、駒澤大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 健二 (MATSUMOTO, Kenji)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：00283838